

2026年1月12日 昼下がりの演奏会 # 3

於：CampGear&Cafe BASE

13:30 ~ プレトーク / 14:00 ~ 演奏会

- Performer -

Pianoforte 浜本 麻実嘉

- Program -

展覧会の絵

(モデスト・ムソルグスキー 作曲)

フロムナード

小人

フロムナード

古城

フロムナード

テュルイリーの庭 — 遊びの後の子どもたちの口喧嘩

スイドロ

フロムナード

卵の殻をつけた雛の踊り

サムエル・ゴールドテンベルクとシュムイレ

————— (休憩) —————

フロムナード

リモージュの市場

カタコンベ

死せる言葉による死者への呼びかけ

鶏の足の上に建つ小屋 — バーバ・ヤーガ

キエフの大門

モデスト・ペトローヴィチ・ムソルグスキー(1839-1881)は、ロシア北西プスコフ州にあるカレヴォという村に生まれ、作曲家集団「ロシア五人組」の一人として活躍した。『展覧会の絵』や「禿山の一夜」が特に有名な作品であるが、彼の主な作品は歌曲と歌劇が占めており、器楽曲は極めて少ない。彼の独特な書法や技術はヨーロッパの伝統的な音楽理論の観点からは異質であり、未熟と捉える人も少なくなかったが、彼の才能を何とかして世に知らしめおうとした盟友リムスキー＝コルサコフによって修正が加えられ発表されているものも少なくない。

さて、今回演奏する組曲《展覧会の絵》は、ムソルグスキーの親友である建築家・デザイナーのヴィクトル・アレクサンドロヴィチ・ハルトマン(ガルトマン)の、動脈瘤による早すぎる死の翌年開かれた遺作展の印象をもとに1874年6月のたった3週間で書き上げられたピアノ組曲である。

後にさまざまな作曲家によって編曲されており、冒頭の《プロムナード》の旋律がトランペットによって奏でられるのが印象的な、モーリス・ラヴェルによる管弦楽編曲版が特に有名であろう。今回は、編曲版ではなく、ムソルグスキー本人によって書かれた原曲である。オーケストラ版に親しんだ方にとっては、新鮮に聞こえる部分も多いかもしれない。さて、順を追って曲をみてみよう。

プロムナード

Allegro giusto, nel modo russo, senza allegrezza, ma poco sostenuto = 正確なテンポで、ロシアの調べのように、陽気でなく、各音符の長さは保ち気味で。

変ロ長調の2小節の単旋律に続いて、それに応えるように厚みを持った和音を伴う旋律が奏でられる。それは一人が歌った後に合唱が続くというロシアの合唱の形式を思わせるものである。このプロムナードは冒頭のみならず、組曲

中の曲間に形を変えながらたびたび演奏される。展覧会の会場を絵画から絵画へと移動するときの様子であり、その時々感情が色濃くあらわれる。

小人

醜い小人が驚いたように飛び跳ね、動き回る様子。明るい曲調のプロムナードから一転して始まる重く激しい曲調は、ムソルグスキーにとって青天の霹靂であったハルトマンの死をも髣髴させるよう。素早く動いては急に留まるような動き、また調性を揺るがそうとするような半音階的な動きに安定性は崩される。死を悼む悲痛な雰囲気とさえ思えるような楽曲である。

プロムナード

Moderato comodo assai e con delicatezza = 大いに自由な気分で、そして優美に。過去のを回想しているかのような、牧歌的な響き。

古城

吟遊詩人が中世の城の前で歌う、ノスタルジックな哀愁に満ちている。一曲を通して同じ低音(ベース音)が保続され、重々しい雰囲気がある一方、舟唄らしいリズム感もある。終わりの方は息絶え絶えのよう。ラヴェル版ではアルト・サクソフォンのソロでもお馴染み。

プロムナード

Moderato non tanto, pesante = あまり控え目になりすぎず、重厚に。これまでの雰囲気から一点、晴れやかさを感じる響き。旋律は途中で終わり、エコーのように反響して次の曲へ。

テュルイリーの庭

— 遊びの後の子どもたちの口喧嘩

これまでの曲とは違い、高めの音域。リズムも軽やかで、全体的に明るい。ところどころに感じられる不安定さは、いかにも子どもらしさのようなものをも感じさせるよう。

ブイドロ

ブイドロ(ビドロとも)は牛車のことだが、「家畜のように虐げられた人々」を比喩的に表

すものでもある。対応する具体的なハルトマンの作品が全く不明で、もしかしたら、ロシア帝国の支配下で弾圧されていた当時のポーランドの人々を描いているのかもしれない。一步一步、重く踏みしめるような音型が印象的。冒頭のメロディは、ラヴェル版ではチューバやユーフォニウムなどで演奏されるのが印象的である。

プロムナード

Tranquillo = 静かに。平穩に。ここでは短調で奏でられ、旋律は初めの2音が欠落している。だんだんと音域を下げ、畳み掛けるように流れてゆき、最後には次の曲の予兆があらわれる。

卵の殻をつけた雛の踊り

この絵はバレエの衣装デザインのためのスケッチ。シンプルな和音に、さまざまな装飾音が与えられ、賑やかな曲調となっている。

サムエル・ゴールドデンベルクと

シュムイレ

それぞれ、裕福なユダヤ人と貧乏なユダヤ人の典型的な名前。この二人の言い争いである。冒頭の高圧的なフレーズは裕福なユダヤ人、か細く震えるような同音連打のフレーズは貧乏なユダヤ人か。この同音連打は、ラヴェル版ではミュートをつけたトランペットが印象的。

プロムナード

Allegro giusto, nel modo russo, poco sostenuto = 正確なテンポで、ロシアの調べのように、各音符の長さは保ち気味で。冒頭のプロムナードと調も同じで、似ているがところどころ省略や改変がある。

リモージュの市場

リズムや和音の変化が目まぐるしい、色彩豊かな活発な風俗描写。

カタコンベ

カタコンベとは、地下に作られたローマ時代の共同墓地で、キリスト教徒の集会の場としても使われていた。楽譜は白い音符（二分音符や全音符など）が多く、古い時代の様式を思わせ

る見た目である。前曲の市井の生活感あふれる会話の様子から一転し、地下の空間に入り、死者の言葉へと変わってゆくのである。

死せる言葉による死者への呼びかけ

プロムナードの変形で、あたかも親しかった故ハルトマンに何かを問いかけているよう。最後に現れる長調の和音は、まるで魂が安らかに天へ昇り行くさまを描いているよう。

鶏の足の上に建つ小屋 — バーバ・ヤーガ

「バーバ・ヤーガ（ヤガー）」はスラヴ文化圏の民話に出てくる、森に棲んでいる老婆の妖怪のようなもの。この奇抜な小屋に住み、助けてくれたり邪魔をしたりするという。ファンタジックで、神秘と不気味さが同居する。

キエフの大門

キエフ（キーウ）に再建される予定だった大門（ボガティル門）のコンテスト用スケッチ。ハルトマンの案は絶賛されたが、再建計画自体がなくなったという。低音域で奏でられる鐘のようなモチーフが印象的だが、終盤では鐘が様々な鳴り響くかのように旋律が紡がれ、これはラヴェル版に無い表現となっている。それらの鐘は最後に収斂し、力強く曲を終える。

【演奏者】

ピアノ：

浜本 麻実嘉（はまもと・まみか）

大阪音楽大学ピアノ演奏家特別コース4年生。第16回ベーテンピアノコンクール自由曲コース（大学・院生A部門）第2位、Beethoven Young Musician Competition Advanced Artist カテゴリー第1位など、国内外のコンクールで入賞。

演奏活動では、Japan Liszt Piano Academy「若きピアニストとの出会い vol.1」、ポラリス国際音楽祭「Next Talent『音の万華鏡』」、島村楽器グランフロント大阪「Flesh Talents! 煌めくピアノコンチェルト vol.1」、International

Piano Camp Seoul 2025 修了コンサートなどに出演。また、第34回大東第九コンサートでコンチェルトのソリストを務めるほか、2025大阪・関西万博にて開催されたa-tune「e-Symphony in EXPO 2025 ～ Music Unites the World～」ではプログラム内で独奏を行った。ライブハウスでも演奏するなど、活動の幅を広げている。

これまでに一本松直子、福井亜貴子、東桂子の各氏に師事。現在は赤松林太郎、阿見真依子、岡原慎也各氏のもとで研鑽を積む。また、小学生の頃からヴィルヘルム・ケンプの愛弟子、田村美和に師事し、秦はるひ、パリ国立高等音楽院教授イヴ・アンリ各氏の指導も受ける。

山岡トロイメライ音楽財団第1期奨学生。

プレトーク・司会：

仮屋 賢一（かりや・けんいち）

作曲家で俳人。

2025年、大阪・関西万博のステージのために『Uni-Tunes』を作曲、また本番ではこの曲を含め、万博にて指揮を務める。

2017年、イタリア・アルバ音楽祭に作曲家として参加し、フルートオーケストラのための『蝶 Le Farfalle』を新作初演。また、武満徹作曲のピアノ曲『ロマンス』をフルートオーケストラ用に編曲し、こちらも初演。2024年3月には、私立高等学校の吹奏楽部定期演奏会において、オリジナルミュージカル曲の作詞作曲を担当。

また、今様音楽企画のメンバーとして、「美山音楽祭」の準備・企画・運営に尽力。音楽祭期間中は、新曲の初演のみならず、司会やワークショップ講師やトークショー登壇なども行う。

作曲は独学。今様音楽企画、関西現代音楽交流協会、関西室内楽協会に所属。また、俳句雑誌「壺」代表として俳句も嗜む。

昼下がりの演奏会 於：CampGear&Cafe BASE

《今後の予定》

#4

2026年2月14日（土）

クラリネット&ピアノ

#5

2026年3月8日（日）

フルート&ピアノ

13:30～プレトーク / 14:00～演奏会
入場無料・0歳から入場可・出入自由

～「昼下がりの演奏会」とは～

ここCampGear&Cafe BASEを、「誰でも気軽に音楽と触れ合える」場にしたい、そんな思いで2025年11月に開始したシリーズです。本格的でありながら、ふらっと訪れて、気軽に楽しめる演奏会です。

今回のイベントについて、以下のQRコードのアンケートからぜひご意見・ご感想等お聞かせください！ いただいた貴重なご意見は、今後より良いイベントを創り上げていくため、参考にさせていただきます。



主催：

合同会社リコラボ

代表 仮屋賢一（作曲家・俳人）

ウェブサイト <https://ricollab-create.com/>

お問い合わせ：075-275-7570

info@ricollab-create.com

右のQRコードからLINE友だち登録して、イベント最新情報をGET！ ここからお問い合わせもしていただけます。

